

はっ とり ちょう しち
服部長七

服部長七 (1840 ~ 1919)

肖像画：岩津天満宮蔵

石をつくったとんでもない男
— 人造石工法による土木事業の開拓者 —

服部長七は、1840(天保11)年に碧海郡棚尾村(現碧南市)の左官屋の三男として生まれた。30歳頃まで各地で職を遍歴し、1874(明治7)年東京でたたき屋となる。東京市民にきれいな水を提供するため、たたきによる盧水器を考案最中に、1876年、水中で固まる「長七たたき」を考案した。長七たたきとは、マサ土と消石灰を混ぜ、水か海水で練り合せたものは、空気中の炭酸ガスを吸収して固まり石のようになる。

服部長七は、「長七たたき(人造石)」の技法を大規模土木工事に応用した土木事業のパイオニアである。明治期のセメント

が普及する過渡期において、土木工事の正式工法として、人造石工法は全国各地の築港、護岸、樋管などの工事で行われた。



宇品港の現場風景

写真：岩津天満宮蔵

品川弥二郎子爵の後ろ盾

1877(明治10)年の第一回内国勸業博覧会で、長七は泉水池の噴水器の工事を請け負った。樋竹では噴水しないことが判り、自費でもって木樋を伏せて見事噴水させた工事に品川弥二郎子爵から激賞され、長七の人物を信用された。長七の、手間も賃金も眼中に置かないのは並みの者ではないと見込まれた。また長七は、その人柄を認めた品川子爵からの後ろ盾があったからこそ、以後の大工事をを行うことができるようになった。

人造石の名を受け、全国に普及

1878(明治11)年、岡崎の夫婦橋をたたき工事で築造した。

第二回内国勸業博覧会開会前、会場内の泉水池のたたき工事を視察した外国人から人造石は何で作っているか、と聞かれたことから、以後「人造石」と呼ぶようになった。1882年高浜の荒地を買い入れ、服部新田堤防を試みに人造石で築き成功した。岡山吉備開墾社の社員に人造石工法の秘法を伝授し、その普及に努めた。千田貞暁県令から人造石



明治用水旧頭首工の遺構

写真：石田正治

工法で広島宇品築港を請け負ったが、難工事の為工事費が膨れて完成が遅れた。千田知事は新潟県知事に任命され、その完成を見ないまま広島を去った。

その後、長七は、愛媛県三津浜の波止場新田に築堤、佐渡の相川港の護岸、熱田白鳥貯木場樋門、生野銀山の貯水池、豊橋の神野新田干拓堤防の築堤、台湾の基隆・淡水港改築、四日市旧港の潮吹き防波堤の築堤、矢作川の明治用水頭首工、碧南の前浜新田護岸、および県下の樋管、樋門など多くの人造石工事を行った。

1904年、長七は一切の工事から手を引き、後に岩津天神山に隠栖し、天満宮を再建して80歳で大往生を遂げた。



四日市旧港潮吹き防波堤

：大橋公雄

(大橋公雄)